

## 令和5年度 第1回神戸市就学・教育支援委員会

### 議事要旨

- 1 開催日時 令和5年6月1日(木) 15時~17時
- 2 開催場所 神戸市総合教育センター701号室
- 3 出席委員 石倉委員長、中尾委員、小林委員、上原委員、高田委員、中西委員、河崎委員、  
関口委員(オンライン)、西田委員、二宮委員  
オブザーバー 楠原校長、島崎園長
- 4 議事
  - (1)「障害のある児童生徒の学びの充実について」(資料1)
  - (2)「自校通級設置と拠点通級指導教室のあり方について」(資料2)  
(事務局より資料1・資料2について説明)

### 【資料1・資料2の説明に関する質疑応答】

#### ●委員長

- ・事務局より資料1・資料2について説明があったが、質問があればお願いしたい。

#### ●委員

- ・通級指導教室の教員は、通級指導を専門としているのか。(事務局：ご明察のとおり)
- ・通級指導教室では何時間程度学習をしているのか。授業は1対1で行うのか、複数人の児童をまとめて指導しているのか。

#### ○事務局

- ・通級は放課後だけではなく、一つの教育課程であるため、通常の授業を抜けて、午前中から通級指導教室で指導を受ける場合もある。
- ・担当者は1コマ60分から90分で実施していて、かわるがわる子供がやってくる。
- ・子供の状況や、伸ばしたい力に応じて指導方法が異なる。1対1で対応する場合やペアで指導することもある。時には、数名の子供に対して、学校の授業を想定した形式で行うこともあり、一人ひとりの個別の指導計画にもとづいて、子供や状況に応じた対応を行っている。

#### ●委員

- ・自校通級が広がったことで、通級指導を受けたいという相談を受ける。認知面で軽度の障害がある場合、特別支援学級を選択するのか、あるいは通常学級を選択するのか。
- ・ADHDなどの子供たちには、通級指導をすすめていたが、実際の就学指導ではどのように対応しているのか。
- ・神戸市の通級制度は、幼稚園や保育所へ通う幼児もいる。小学校へ入学前に一旦終了して再開するということもあるが、継続性についてはどうか。

#### ○事務局

- ・特別支援学級での教育課程を望まれるのか、それとも拠点や自校通級で学習面のフォロー

がよいのか、子供の状況や、本人や保護者のニーズに合わせて検討している。

・子供の学びの場としてどこがよいのか検討するために、特別支援教育相談センターで学びの場の変更についても対応している。

・神戸市では、幼稚園を卒園すると、幼児通級は一旦終了になり、小学校でさらに通級指導をしていくのかを考える。義務教育前と義務教育後になるため、制度的には通級指導は終了という形式であるが、内実としては、小学校に入っても通級指導を継続していこう、あるいは、難聴の子供は今後もフォローしようというように対応している。

●委員長

・本来であれば、知的障害の子供は通級指導の対象にならないと認識しているが。

○事務局

・ご明察のとおり。実態としては、軽度で養育手帳を持っていない子供について対応していることもある。

●委員

・資料2「障害のある児童生徒の学ぶ場について (p.3)」に関して、この10年間で障害のある児童生徒数が増加しているが、障害の発生率が上がってきているのか。もしくは今まで埋もれていた人が通い始めたのか、あるいは希望する人が増えているのか。

・整形外科医としては、肢体不自由の子供が増えているという印象はないため、確認したい。

○事務局

・養育手帳の取得や、知的の遅れはないが自閉スペクトラム症の診断を受けて、30名の学級では学ぶことが難しい子供が、特別支援学級に入級している。

・令和5年度の特徴であるが、特別支援学校に関しては小学部や中学部の知的障害部門の児童生徒数が増えている傾向にある。

・平成19年特別支援教育にかわり、特別支援学校や特別支援学級で学ぶ子供たちが増えていることが要因であると思っている。

●委員

・資料2「令和4年度自校通級アンケート結果 (p.6)」に関して、「通級に行くのは楽しみだ」、「通級に通うことでがんばりたいことやできるようになったことがある」について、「とてもそうだ」「まあそうだ」ではない子供の特徴や共通性はあるのか。

○事務局

・多くの子供は、通級にきて「楽しい」「こんなことができてうれしい」と満足感を得てもらえるが、なかには「楽しくなかった」という表現しかできない子供もいる。本当に楽しくなかったのであれば、教員の指導不足だと思うが、家でもうまく自分を表現ができなかったり、家族での揉め事が多かったりなど、家庭の状況が背景にあることもある。

・子供に満足してもらう指導をするためにはどうしていきべきなのか、課題である。

●委員

・家庭環境に問題がある子供というのが、共通点という認識でよいか。

○事務局

・家庭環境に問題がなくても、ネガティブな回答をしている子供もいるため、共通点とまでは言えない。

○事務局

・選択項目の回答結果については分析を終えているが、自由筆記の回答についてはこれから時間をかけて分析をしていく。分析が終わり次第、本委員会で報告する。

・文部科学省によると、特別な教育課程について、本人や周囲が理解しているということが大事であり、自校通級が当たり前のよう存在するというのが理想だとしている。そのようなことができずに通級へ通っていたことが原因としてあるかもしれないと思っている。

●委員

・自校通級について、小学校の設置数は増えているが、中学校は限定的である。これは効果を考えたうえでの判断なのか。

・特別支援学級についても、小学校は交流が盛んだが、中学校では特別支援学級のメリットを感じにくいと思っている方も多。それゆえに、特別支援学校の中学部の生徒数が増えてきているのではないかと思うが、中学校の自校通級は増やしていく予定であるのか。

○事務局

・令和2年度から自校通級の設置をはじめた。小学校の低学年にはニーズが多いことが分かっていたため、令和3年度までは小学校のみに設置していた。

・令和4年度に初めて鈴蘭台中学校に自校通級を設置した。以前視察へ行った際、自校通級に通う中学3年生の児童が、「この教室があったから今の自分がある」と言っていて、今後の進路や目標についても話してくれた。

・今年度は、新たに3校の中学校に自校通級を設置しているが、今後他の中学校も、4校の動向をみて、自校通級を設置したいという学校が増えていくと思っている。

●委員長

・通級指導教室では、自立活動の指導をしている。教科とは別に、教科の基盤となるコミュニケーションなどを指導している。

**【自校通級の兼務発令による小中規模校への配置に関して】**

●委員長

・兼務発令をすることにより自校通級の設置校数を増やしていくということについて、委員よりご意見いただきたい。

●委員

・他市では、拠点校方式で通級指導担当教員が毎日別の教室に通い、すべての学校をまわっている。兼務発令ができるのであれば、まったく問題ないと思う。

・自校通級のはじまりは神戸市である。平成2年～平成4年に、星和台小学校が国の研究指定を受けてLDの通級をはじめ、平成15年～平成17年に本山中学校が特別支援教育制度について研究をした。これが小学校及び中学校の通級のはじまりである。

・平成19年特別支援教育へ移行する際には、本山中学校が文部科学省へ特別支援教室を設置することを提案したが、当時は実現しなかった。20年後ようやく通級教室を推進しているという流れになっている。神戸市が自校通級を増やしていくのは、30年前の研究成果のおかげである。教員は、このような背景や、自校通級は何かについて詳しく知らない。

・兼務発令について委員会で建設的な意見を得るためには、なぜ自校通級が必要なのかについて、整理をして説明する必要がある。そのためには、自校通級アンケートでネガティブな回答や、特別支援学級の児童生徒数の推移を分析しなければ、自校通級を進めるべきかどうか曖昧なまま進んでしまうと感じる。

・分析、考察を踏まえて自校通級を増やす必要があるということを、事務局から説明があれば、委員も意見を出しやすいと思う。

#### ●委員長

・事務局より、自校通級の仕組みと、他校通級と比較した自校通級のメリットについて説明をお願いしたい。

#### ○事務局

・神戸市は昭和の時代から、幼稚園・小学校・中学校の通級担当者が同じ教室で指導するという独特の拠点校方式を取り入れていて、とても歴史がある。

・拠点校通級指導教室には、「きこえとことばの教室」と「そだちとこころの教室」があり、他の小学校の児童がきて、最大2時間程度授業を受ける。例えば、神戸祇園小学校には、湊川多聞教室という通級指導教室（きこえとことばの教室）を設置しており、難聴の子供たちは幼児からそこで学び、小学校も継続して指導を受けることができる。そだちとこころの教室は、小グループでの学びが必要な場合があるため、何名かの児童が集まり、集団で学習をする場合もある。このような形式が拠点校である。

・自校通級は、令和2年度に湊小学校に設置した。「自校」という名前のおり、湊小学校の通級教室には湊小学校の児童だけが通う。

・小学1年生の児童のなかには、集団生活でみんなと同じタイミングで活動できない児童もいる。そのような場合に、どのようにすればみんなと一緒に行動することや、コミュニケーションがとれるのかを学び、クラスに戻って実践する。そして、コミュニケーションができるようになったという体験を積み重ねていく。これが自校通級の姿である。

・令和5年3月文部科学省の通知では、拠点校通級指導教室が必要な子供もいるが、在籍する学校で子供たちが生きる力を伸ばしていく必要があり、自校通級を推進していくべきであると方針が出た。

・これからは、通っている学校で特別な教育課程を組み込むことができる自校通級、もしくは通級指導教室の教員による巡回指導をしっかりとやっていきたいと思う。

#### ●委員

・拠点校通級指導教室は、回数の問題がある。それに比べて自校通級は、安定した回数で通うことができるため、ぜひ進めてもらいたい。担当する教員の負担がなければ、近隣のとこ

ろで兼務ができればありがたいと思う。

- ・現在、境界知能の子供の多くが通級指導を受けている。そうした場合、通級指導教室を設ければ設けるほど呼び水効果にもなると考えるが、明確でない状態で運営すると問題があると思う。

- ・近年様々な補聴器が使われていて、ロジャー型のものなど各校で利用されている。フィッティングの際には、総合療育センターの言語聴覚士が訪問してアドバイスをしているが、指導する教員の専門性をどの程度まで確保できるのか疑問に思う。医学的な資格がない状態でも、指導できる専門性を身に付けていく必要があると思う。

#### ○事務局

- ・昨年度から校内支援委員会の質の向上に取り組んでいる。子供を見立てる特性や、障害の程度を把握するために、支援検討シートを作成している。それをもとに、学習障害なのか、対人面で課題があるのかなどを整理し、これまで以上に各学校の潜在数調査の精度を高める取り組みを進めている。

- ・自校通級を設置すると、これまで実態が分からない状況であった子供たちの掘り起こしができると思う。小学校低学年からしっかり伸ばしていきたいと考えている。

#### ●委員

- ・きこえとことばの教室は限られていて、遠方の子供たちはどうしても通うことが難しい。そのような子供たちが小学校高学年から徐々に遅れていき、中学生になるとついていけないという子供がいる。巡回して指導をしてもらえることはありがたい。

- ・一方で、マンパワーの問題があると思う。日常の様子を知っている教員が指導することが自校通級のメリットだと思うが、本人や家族が気づいていない部分について、専門性のある通級指導教員であれば問題点を拾い上げて指導することも可能になるのか。

- ・難聴の子供は、補聴器や人工内耳をつけていると聞こえている扱いをされてしまい、授業で困っていることがあるかもしれないが、学習についていけないとだけ思われてしまうことがある。聞こえないことや周囲の配慮不足によって、損をしている子供がいるのではないかと懸念している。

#### ○事務局

- ・巡回指導をしていくのはきこえとことばの教員が担当していくことになると思う。

- ・補聴器や人工内耳の子供たちに対しては、様子を見てフォローができると思うが、そうではないという子供たちへの対応については、きこえとことばの教員がさらに専門性を向上させて対応していく必要があると考えている。

- ・今年度から、総合聴覚センターの言語聴覚士や、委員にも研修の講師をお願いしている。従来の研修を踏襲するのではなく、難聴の子供たちを指導する教員として、専門性を身に付けられる研修をしていきたいと考えている。

- ・発達障害の子供が増えてきているなかで、特に難聴や言語障害について、教員の教育レベルが下がってきていると感じるため、今後強化していきたい。

●委員

- ・拠点校通級指導教室は、防音になっていたり聴力評価ができるなど良さはあるが、毎回拠点校へ通わないといけないのは違うと思う。必要なときに拠点校に行ける仕組みを残しつつ、本来通級指導教室に通うべき子供が通える環境にするのがよいと思う。
- ・マンパワーと専門性の確保ができて、必要な時に拠点校にも通い、言語聴覚士の評価が得られるシステムが実現したらいいと思う。
- ・きこえとことばの言語聴覚士が常に対応するというのは難しいと思うため、協力を得る必要があると思うが、そのあたりを詰めておくべきだと思う。

**【拠点校通級指導担当者による巡回指導のあり方について】**

●委員長

- ・巡回指導の在り方について、委員よりご意見いただきたい。

●委員

- ・きこえとことばの教室には、言語聴覚士の資格を持っている人は何人いるのか。
- ・言語聴覚士が国家資格になった際に、当時きこえとことばの教室の教員は言語聴覚士の資格を取得していた。それ以降は、神戸総合医療専門学校の卒業生を中心に、言語聴覚士をきこえとことばの教室に配置していたが、最近もそのような制度になっているのか。

●委員

- ・今幼稚部に2名卒業生がいる。小学校は通常学級や特別支援学級に何名かいるが、きこえとことばの教室には配属されていない。

●委員

- ・言語聴覚士をきこえとことばの教室に配置する仕組みにすると、専門性が向上するのではないか。

●委員

- ・難聴学級にも言語聴覚士にボランティアで参加してもらっている状況であるが、専門性の向上は難しい課題である。言語聴覚士を集めて、専門性を高めてもらい、研修で教員の専門性を伸ばし、指導できる教員を増やしていくのが理想だと思う。
- ・きこえとことばの教室へ通っている子供は多いが、言語や、難聴、なかには発達障害の子供たちも通っている。感覚として、聴覚の特別支援学校に通っていた子供が難聴学級に在籍し、難聴学級の子供がきこえとことばの教室に通い、きこえとことばの教室に通っていた子供が通常学級にまぎれていると感じている。
- ・巡回指導の在り方については、専門性とマンパワーはかなり難しい問題だと思うが、13名の子供たちを1人の教員がどこまで対応できるのかについて、どのように担保していくのか、どのように言語聴覚士を配置するのかなど、事前にしっかりと整理しておいたほうがよいと思う。

- ★・きこえとことばの教室に通っている小学校の児童は、中学生になるとどうなるのか気に

なっている。小学校を卒業する際に、きこえとことばの教室の教員が引き継いでくれているが、中学校は生徒数が増え、英語の授業が始まる。リスニングで対応できていた子供が中学校でつまづいてしまうことがあり、何か支援できることがあるかもしれないと思っている。

- ・中学校のきこえとことばの教室のニーズはあると思う。進行性の難聴で、小学校できこえとことばの教室に通っていない場合は、どこが受け皿となって対応してくれるのか懸念している。少なくとも、教育現場に近いところで、相談や改善できる場所が必要だと思う。

#### ○事務局

- ・専門性とマンパワーについてはこれからしっかり検討していきたいと考えている。
- ・現在、中学校については、県立聴覚支援学校の教育相談や通級に頼っているところがある。しかし、昨年度の委員会で思春期の指導・支援が大事であると意見をいただき、重要な点であると捉えている。難聴の中学生について、神戸市として今後どう対応するのかしっかりと考えていきたい。

#### ●委員

- ・人工内耳の子供は、中学校まではフォローしていけるが、それ以降はフォローすることができないのが現状である。
- ・学校で希望される場合については、指導や、聴力評価をどのように行っているのかなど、研修の受け入れを検討している。加えて、訪問するような形式で支援も検討していきたいと考えている。教育委員会とこども家庭局は担当が異なるが、協力していきたいと思っている。
- ・重複障害で聴覚の障害がある場合は、特別支援学級に在籍していなければ対応できないことがあるため、訪問して支援することを考えている。
- ・小学校1年、2年の学級の訪問を考えていて、思春期の対応は少し難しいと感じている。学校があまり負担にならない程度で考えていきたい。

#### ●委員

- ・小学校1年生になるタイミングが課題だと感じているため、ぜひ進めていただきたい。
- ・支援検討シートはどういうものなのか、内容について知りたい。

#### ○事務局

- ・実物があるため、持参する。

### 【通級指導担当教員の専門性向上と担当となる前にどれだけ専門性を身につけることができるのか】

#### ●委員長

- ・通常指導教室では、原則的に自立活動を指導することになるが、小学校教諭の免許のみ持っている教員は、自立活動を知らない、あるいは聞いたことがない教員がほとんどである。担当者の専門性向上についてどのようなことができるのか、意見をいただきたい。

#### ●委員

- ・自立活動を知らない教員が多いため、自立活動とは何かを教える必要があると思う。

・専門性とは、どのようなところを目指しているのか。子供の実態の背景にはなにがあるのかが重要で、今の教員は背景が見えていなことが課題であると感じている。

・真面目に一生懸命取り組み、子供にあった指導をしようと思っても、子供が見えていなければ、その指導があっているかどうか不安になる。「子供の背景には、このようなことがあるかもしれないため、この分野の専門家に相談しよう」、「このような対応を検討しよう」などといったことを積み重ねていかなければ、専門性は身につかない。そこをケアする研修や、研修の効果を確認する必要がある。

#### ●委員

・幼少期から言語や情緒、体のことなど様々な要素がどのように積みあがって、小学校1年生から学習ができるようになるのか、人間の発達や育ちを理解することが大切である。

・教員のなかには、研修や、How to 本で得た知識をそのまま実践していることが多く、実際には子供にあっていない指導だと感じることもある。事例検討のあり方や、どのようにアセスメントして子供を読み取り、何をしていけないといけないのかなど、様々な場面で学び経験をしていくことが大切であると思う。

・それぞれの教員が力を発揮できるような人事も大切だと思う。

#### ○事務局

・現在の研修は、事例検討も行っているが、学習面や行動面に関する研修が多い。委員からの意見のとおり、子供の背景から仮説をたて、それぞれの子供に合わせた自立活動を行っていく研修を組み入れる必要があると思っている。

#### ●委員

・受け身の研修ではなく、積極的な研修でなければ専門性は身につかない。積極的に学ぼうとする人は必ず専門性が向上する。

・教員の研修意欲が低下していることを懸念している。教員の学ぶ意識に格差があるように感じるため、全体的な教員の底上げを図ってもらいたいと思う。

#### ●委員長

・自立活動とは、通常学級のカリキュラムにはなく、特別支援学校に特別に置かれている指導領域である。特別支援学校教諭免許を持っている教員は自立活動について分かっていて、指導できるはずであるため、そのような教員をうまく巻き込んでいくのはどうか。

・自立活動が分からない教員を育成するより、まずは分かっている教員から通級指導教室で指導してもらおうというの必要なのではないかと思う。

#### ●委員

・書字障害の子供たちについて、診断をすることはできるが、医療的な立場から支援することが難しい。このような子供たちはどこで支援を受けられるのか。

#### ○事務局

・大事な課題であると認識している。

・読み書きについて、昨年度よりスクリーニングテストを行っている。そこで課題がある子

供については、指導内容についてのプログラムを作成して、また、特別支援教育相談センターへの相談も受け付けている。

・LD の課題を把握できた子供に対しては、小学校低学年のあいだに伸ばしていけるよう、今後さらに加速して進めていきたいと考えている。

・自校通級や拠点通級指導教室の教員も LD 指導は力を入れているところであり、今後もしっかりとやっていきたいと思っている。

#### ●委員

・きこえとことばの教室は歴史があるため、ベテランの教員は熱い思いを持っている。その熱い思いやパッションが若い教員へ伝わるようなシステムがあればいいと思う。

・自校通級になる際に、きこえとことばの教員をどのように配置して、指導していくのかについて、しっかりと整理しておくべきだと考える。将来に課題を残さないよう、急ぎすぎずに、しっかりとした形式を今整えることが大切だと思う。

・課題を整理して、うまくかみ合っていくことができれば、新しい教員がよい風になって、難聴児の子供たちにとってもよい流れになると感じていて、今はチャンスだと捉えている。

#### ●委員

・通級指導担当教員の指導体制について、新しく赴任した教員は、チームでサポートを受けながら学んでいくシステムはあるのか。気軽に相談できるのか。

#### ○事務局

・通級指導教室の OJT において、メンター・メンティー制度があり、教室内で教え合っている。また、通級を長く経験している教員が、他の教員へ指導するなど、わからないことを相談しやすい体制が整っている。

#### ★●委員

・通級指導教室は、一人の児童に対して一人の教員が指導するのか、もしくはチームで指導するのか。

#### ○事務局

・先ほどの説明に補足であるが、拠点校の場合は、拠点校には複数名の教員が配置されているため、教室のなかで、新しく赴任した教員へ教えるということができる。

・自校通級の場合は、通級の担当教員は1名のみであるため、近くの拠点校や他の自校通級の教員へ相談して進めている。また、教育実践研修の通級グループで交流するなどして、自校通級の横のつながりを深めている。

・指導については、1人に子供に対して1人の教員が対応するが、困ったことがあれば、拠点校の場合は、チームでどのように指導をすすめるか相談している。自校通級であれば通常学級の担任や、拠点校や他の自校通級の教員へ相談するようにしている。

### 【校内支援委員会の質の向上のために必要なもの】

#### ●委員長

校内支援委員会の質の向上について、事務局より校内支援委員会の役割等について説明をお願いしたい。

○事務局

・これまでは、就学指導委員会と、校内の気になる子供たちを検討するための校内委員会の2種類の委員会を設置していた。昨年度から、児童にとって何が最適かを考える方針にもとづいて、校内支援委員会に集約した。

・校内支援委員会では、学びの場として特別支援学級、通級指導教室、通常学級のいずれが妥当なのか、どのような指導・支援が有効かなど、学びの場の変更を含めて、校内で検討している。

●委員長

・事務局へ質問であるが、支援検討シートはすべての学校が使っているのか。(事務局：ご明察のとおり)

●委員

・校内支援委員会のメンバーは全員教員だと思うが、そうすると意見を出し合っても堂々巡りになる。指導体制を考えたいというときには、委員会や相談センターに在籍している先生方など、違う視点を持つ人を派遣することもよいのではないかと思う。

●委員

・特別支援学校の教員に参加してもらうのもよいのではないか。

○事務局

・昨年度から相談窓口を一元化したことで、特別支援教育相談センターにあらゆる相談が寄せられている。

・学びの支援センターの時代には、検査・面談を行ってから、学校訪問をして、子供の指導・支援を一緒に考えていくことになっていた。今は、相談があるとまずは学校訪問をして、子供の状況や背景を読み取って、学校でどのような支援ができるのかについて話し合っている。その後に、検査が必要かどうかを検討するようなシステムにしている。

・学校訪問をする際には、管理職・コーディネーター・担任等が入って話し合うことをルールにしており、専門的な知見をもったスタッフが入り行っている。

●委員

・資料1「特別支援学級の設置状況と児童生徒数 (p.2)」について、知的障害と自閉症・情緒障害の学級数が最も多く、その次に肢体不自由が多いが、難聴の学級は少ないという特殊な動きをしているように思える。特別支援学級に入級する際に、学級種別は誰が判断をしているのか。

○事務局

・当委員会の内容に、「(3) 校内支援委員会「判断報告書」の検討について」がある。当パートで、子供たちの障害の程度にもとづいて、どの学級種別で学ぶのが妥当かを、委員より意見いただき、最終的には事務局で判断している。

・難聴学級が少ない理由は、神戸市は拠点校方式を取り入れており、神戸祇園小学校と湊翔楠中学校の小学校・中学校それぞれ1校のみに難聴学級を設置しているため、在籍数も少ない。しかし、人工内耳や補聴器を使用している子供たちは市内で100名を超えているという実態があるため、難聴学級以外の子供たちをどう指導・支援していくかを、考えていかなければいけないと思っている。

#### ●委員

・医療と教育の連携の難しさ、奥の深さを感じている。知的障害と情緒障害を合併している子供は多く、肢体不自由と情緒障害や知的障害のある子供、あるいはそれらすべての障害がある場合もある。そのような場合に、その子供にとって、一番の困り事は何かとうことを、誰が判断して、どのような支援をするのかについて、医療と教育が連携していかないとはいえないと思う。

・診察室で、学校に対する不満や困り事を聞くことがある。教員の専門性を高めることは一言で言えないとても難しい問題だと思う。それは医療現場からもフォローをする必要があると思っていて、学校現場だけで、その子供の問題がどこにあるのかを判断して、対応するのは難しいと感じる。例えば、書字障害と診断をして、その後の対応は教育現場に任せるとするのは、学校はとても大変だと思う。

・委員より、自校通級の言葉の説明から始めないといけないと意見があったが、医療現場においても、自校通級など学校について理解できていない小児科医はたくさんいる。診察室で子供の保護者から相談を受けて、診断書を出すだけでなく、医師も仕組みを広く勉強する機会が必要だと思う。

#### 【その他】

#### ●委員

・拠点校と自校通級にはそれぞれの良さがある。視覚では、盲学校と弱視学級があり、専門的なアドバイスをもらえる場所と、日常でサポートしてもらえる場所の両方があると思われている。それぞれの良さを活かして、大学病院とかかりつけ医のようなイメージで、両方を活用できるのがよいのではないかと思う。

・指導できる人が少ないという問題については、指導できる教員をすぐに育てることは難しいが、まずは指導できる教員を中心に、メンター制度や、オンライン上であれば様々なケースを共有・検討しやすいのではないかと思う。

・ひとみ教室と弱視学級に通う子供の保護者が、弱視学級とひとみ教室の専門性の違いを感じて、弱視学級の担当教員はあまり分っていない様子だという話をされていた。自校通級を設置する際に、担当する教員が専門性を身に着けることはとても難しいことだと思う。

#### ●委員

・てんかん重積の子供に対して、プログラムの投与を学校でも行えると通知があり、養護教諭を集めて研修をしている。

・今年度から特別支援学級に入級する保護者の方から、いざというときにプログラムを投与し

でもらえるか相談を受けることがあるが、学校が対応できないと回答したケースもあると確認しており、学校現場では十分に周知されていないように感じている。養護教諭以外の教員へも改めて周知をお願いしたい。

●委員長

・神戸市には、プログラム投与の対応が必要な児童はどのくらいいるのか。

●委員

・対応が必要な児童は少ない。

・重積を経験したことがある場合など、一定の要件を満たす場合に限り指示を出すようお願いをしているが、何名か必要な児童がいる。

・特別支援学校を選択するほど障害の程度は重くない場合は、特別支援学級へ相談に行かれていると聞いている。

●委員

・神戸市の拠点校通級は、幼・小・中と連携して指導・支援していくことができる。

・幼稚園から指導しているところは少ない。幼稚園から学習障害の傾向がある子供だとわかると、その子供に対してどのような指導をすべきか、小学校・中学校と続けて指導・支援できるというモデルケースを構築できるのではないかと思う。そこに神戸の良さがあると思う。

・子供たちの指導のあり方やどこがキーポイントであるのか、子供たちは今何をしないといけないのかなど、発達との関連性もあるため、子供の発達を待たないといけない場面もあると思う。幼児から中学校までであるという柱を活かしてほしい。

●オブザーバー

・委員会の冒頭に、特別支援学級設置状況と児童生徒数について、中学校の特別支援学級の学級数が減っているが、それが特別支援学校の中学部の人数が増えていることにつながっていると説明があった。

・特別支援学校としては小学校・中学校の特別支援学級教育が充実することで、特別支援学校の中学部の在籍数が減ることや、多様な選択肢があるなかで、高等部相当の生徒が特別支援学校高等部以外の道を、自信をもって選択できるようになってほしいと思う。

・また、難聴などの子供が不登校にならずに、学校で自分らしさを発揮しながら学んでほしいと願っている。

●オブザーバー

・通級指導教員の専門性向上について、通級指導教室や特別支援学校で勤務した経験があるが、配属されてからどんなところなのか勉強した。興味を持って学びたいと思っている人もいるが、実際は配属されて勉強するという人が多いのではないかと思っている。

・委員の意見にあったように、自分が積極的に学びたいと思って研修を受ける意欲や、自ら勉強していくことが大事だと思う。

・幼稚園の通級は、様々な幼児を受け入れているため、子供のことを知ることや、保護者対

応など、あらゆることに対応する必要があり、新しく赴任した教員が戸惑っていることもあるが、子供たちのために一生懸命取り組んでいる。長く通級指導教室を担当している教員とうまく連携して頑張っていきたい。